

2026年7月31日（金）

老球の細道933号

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

28日に術後6か月を経過。体重はなかなか増えないが、ランニング、筋トレの負荷は確実に向上している。かつてアキレス腱断裂からの復帰に1年、心臓病（心房細動）からの復活に2年を要した経験がある。「身体は元に戻る」を信じて、日々「たゆまざる 歩みおそろし かつむり」。

今月はサッカーW杯に始まり、終わった1か月だった。参加チーム数の増加によるレベル差、テレビ放映の問題、入場料の高騰、レフリーの判定、そして政治の介入と、今後の世界的スポーツの課題が満載であった。スポーツはこれからどこに向かっていくのだろう。

1・読書から

◆「わずかなことしか知らない人は多くのことを語り、多くのことを知っている人はわずかなことしか語らない」〈ルソー著『エミール（中）』岩波文庫〉：この年になってルソーの言葉が身に染みてわかってきた。わからないことがまだまだたくさんある。他人に知ったかぶりして話すより、他人の話に耳を傾けること。人間の耳は二つ、口は一つ。

◆「死ぬまで安心して生きよう」〈司馬遼太郎著『箱根の坂（上）』講談社〉：鎌倉時代中期の僧で時宗の開祖一遍の言葉。踊念仏で有名。いつの日か、誰もが生涯一度は死を経験する。恐れるにあらず。生かされているうちは精一杯シンプルに楽しく生きよう。

2・新聞から

◆「あまり遠くのこととか先のこととかを考えるのではなく、自分の半径五メートル以内のことをちゃんとやっていこう」〈朝日：折々のことば：宮崎駿〉：若い頃は「日本一を目指す」などと大言壮語していたが、今は私を必要としてくれる身近な人たちのために生きて行こう。まずは依頼されたクリニックを喜んでもらえるようにがんばろう。

◆「サッカーを生涯そばに置き、ひと味違う、豊かな人生を送ってほしい」〈朝日：国学院久我山李済華監督〉：W杯北中米大会に出場した塩貝選手の高校時代恩師の言葉。選手には常に「サッカーで日本一、勉強で東大を目指せ」と話していたという。教え子たちが社会の第一線で活躍し、そばにバスケットがお付き合いできることを願わざるをえない。

◆「失敗したか、しなかっただけでなく、挑戦したか、しなかったを選ぶ人生にしたいと思った」〈朝日：野球米スタンフォード大・佐々木麟太郎〉：日本のプロ野球ドラフト1位を蹴って、米大リーグ8巡目235位指名球団に入団するという。かつての北大クラーク博士の「少年よ大志を抱け」は現在でも生きていた。会津のバスケット界の子ども達にも。

◆「個人より全体の利益を考える。私たちが最も結束したチームであることを示すことができた」〈朝日：W杯サッカー〉：どんなレベルであろうとトップレベルになればなるほどチームワークが問われる。M・ジョーダン曰く「『TEAM（チーム）』に『I（私）』の文字はない」。世界のスーパースターは本当にスゴイ奴ばかりだが、利己的な輩は誰もいない。